

## 第6回里山学びと交流の森検討会会議録要旨

○日時

平成14年12月17日(火) 午後6時00分から午後8時15分まで

○場所

愛知県産業貿易館西館9階第3会議室

○出席者

大竹勝委員、賀来宏和委員、加藤倫教委員、木村光伸委員、鈴木敏明委員、津田美知子委員、出口なほ子委員、波田善夫委員、林進委員、馬宮孝好委員

(加藤裕重委員は欠席)

・開会

1. あいさつ(愛知県国際博推進局中谷局長、木村座長)

2. 議事

木村座長

・本日の議事録署名人は加藤倫教委員と鈴木敏明委員にお願いする。

(1) 里山学びと交流の森ゲート施設について

事務局

・資料1「里山学びと交流の森ゲート施設について(案)」について説明。

加藤(倫)委員

・展望広場について、どちら側への展望を確保しようと考えているか。

事務局

・図で言うと左側、西方向に向いた展望になる。

木村座長

・ゲート施設について、博覧会の施設計画と重ねられるとどのように変わっていくのかよく分かると思う。

博覧会協会

・博覧会協会の計画では、ハード面については県が設置したのを使わせていただく。ソフト面については「環境教育プログラム」という形で現在計画を作成している。海上、及び青少年公園の森林部分を使って、どのように環境教育を進めるかという視点で考えている。

・基本的な考え方として、日本型の環境教育プログラムを博覧会時まで作り上げ、それを博

覧会時に実際に実行し、博覧会後開発したプログラムを各地域、それから世界に広げるという大きな構想を考えている。

- ・青少年公園地区については、会場の南東側に広がる森林体感ゾーンで、テーマを「森と光と水」に絞り観察をしていく。海上地区については「里山と土」に視点をおこうと考えている。

- ・海上地区については、今のトレイルの中で県が造る歩道、広場、休憩所等を使い、土をテーマとした環境教育を展開しようと考えている。もうひとつは、沢沿いの現状の道を使い、場合によっては会場外も含めて移動する形で里山を観察するコースを考えたいと思っている。

- ・土のゾーンについては、森林を司る基盤になる土、焼き物や地盤となる土というところに焦点を当て、里山については、林と人との生活の関係というところに視点を当ててストーリーを考えていきたい。今年度末を目標に具体的にどんなプログラムを展開するかを検討したい。

- ・海上地区の里山遊歩ゾーンについては、土の原型に触れることを通して、身体感覚の復元と、人と自然との関係性の中で育まれた里山の自然の体感という大きなコンセプトで、これから検討したい。

- ・遊歩道のルートの設定について、プログラムの視点に合わせて当初考えていたものから少し変更することも、現段階で県に検討してほしいと考えている。

#### 木村座長

- ・ハードは県が博覧会の計画に配慮しながら進めるということか。

- ・この部分は、愛知万博の検討会議の中で現状の改変に対して一番センシティブだった場所で、博覧会としてどう使いたいのかということが優先して議論されてきた。だから、県が整備したものを協会が使っていただくという言い方をされると、話の筋が違うという気がする。

#### 博覧会協会

- ・検討会議の時、B I E登録の時には、この遊歩ゾーンの所には政府館を造るという計画であった。昨年の7月に私共のプロデューサーが決まり計画を具体化していく中で、11月位にこの所の工事の仕方等について検討した結果、政府館の位置について県の恒久施設の隣接地に移動するという計画を検討した。その時に里山遊歩ゾーンをここに設けるという整理をし、県と協会との意見の交換の中で、里山遊歩ゾーンのハード面については県が整備するという役割分担をした。協会の方では、その中でどのように展開するかというソフト面を検討する。それに配慮するとともに、将来的な県の要望との両方を含めた形で歩道、各種施設の整備をする。

- ・今回県から説明した内容については、協会で考えていることと調整しながら検討を進めている内容である。歩道の位置等も、今後協会のプログラムを詰めていく中で連携をとりながら進めることになる。

#### 林委員

- ・ゲート施設は実物展示という屋外学習エリアである。屋外学習は森全体でやるのだろう。そういう意味で展望広場というのは、機能としては林内を展望する林間広場であるが、森林の側からみれば人為的につくる林間ギャップである。そのギャップに意義を持つのでそれを造り、

それが林間展望としての機能を持つ、という発想だと思う。

- ・展望台については、外の景色を見るのではなく、いわば目線に近い所で森林の上部を眺めることが森林学習上非常に重要なことであり、そのためにやるという位置付けをきちんとすることが必要だと思う。

- ・遊歩道について「現状の地形を極力利用する」というのは、いわば人間がつけた道に森林側はなじんできていて、それをあえて変えることはなくそのなじみ方を見ていく、あるいはなじみ方というのを部分的に少し改変してみてどのように森が変化してくかを見るために、1本道ではなくぐるっと回って変化をつかむ、だから地形を壊さないのだ、ということである。「地形を壊さない」という書き方は防御線を張っている感じがする。「現在の地形を極力利用する」という意味での積極的な位置付けが必要。

- ・遊歩道は機能的には外周休憩スペースであるが、これはスムーズな動線を確保すると共に林内での観察ポイントとなる。せっかく造るのであれば、単に外周とか休憩スペースではなく、全体として設置する施設が展示機能を持ち、同時に環境学習への導入部になっていくという位置付けをしておく、ゲート施設の持っている役割がより分かり易くなり、はっきりしてくると思う。

#### **木村座長**

- ・森の何を見せるかという視点を明確にした上で、それをどう設計するかという意見だと思う。

#### **馬宮委員**

- ・説明された図で、万博会場となる場所のうちどの領域が県の所有地になるのか。
- ・博覧会協会からの話は、万博中に万博の参加者が万博会場外にはみでた回遊路を通るという想定のように聞こえた。それはどこを通るのか。

#### **事務局**

- ・県の恒久施設から市民交流広場、博覧会時アプローチと書いてあるところは仮設の施設となる。古窯の保存施設から遊歩ゾーン、ゲート施設は恒久という形で残る施設となる。従って、土地も残るところは県有地、協会がやられる部分については愛工大の所有地となる。

#### **博覧会協会**

- ・先程回遊と申し上げたのは、県が整備する、駐車場から林間展望広場の間を回遊させるというシステムである。

- ・前回のこの検討会で賀来委員や木村委員等がお話をされたことを参考にさせていただきながら、里山を見るというプログラムの中で、必ずしもボンデッドエリア、お金をとるエリアだけでなく、その外へも場合によっては出ることを含めて、現在のたたき台では検討している。ただ、何を見るかによって会場外のどこまで出るかも変わってくると思う。こちらについては特に県に施設を整備していただくということではなく、現在あるルートを使いながら見ていくという形を考えている。

### 木村座長

- ・会場の外へ出る可能性については、今まで大変否定的にきいていたことであるので、大いなる方向転換だと思う。これがいい方向にいけばいいと思う。

### 博覧会協会

- ・海上地区の環境教育プログラムは、全てインタープリター付きで移動することを前提とし、完全に管理型の環境教育という形を考えている。そのため、場合によっては会場外に出るのも完全にインタープリターが付きながら出るということで、完全に管理することを前提としており自由に入出りできるというわけではない。

### 木村座長

- ・ソフトの成熟度によってできるかどうかわからないということもあるのだろうか。

### 馬宮委員

- ・回遊というのは万博会場の中で行ったり来たりするということが。

### 博覧会協会

- ・この地図では1本線で書いてあるが、2本線になる可能性もある。

### 木村座長

- ・上りと下りで別ルートになるという話だろうか。

### 博覧会協会

- ・そのとおりである。

### 出口委員

- ・地元としては、今協会のほうからいいお話を聞いた。
- ・博覧会開催時の海上地区について会場外に出てもいいという話であれば、サテライト的に笹島で事業を展開するように、現在パイロット事業で取り組んでいる海上の里の地区についてもそのようなサテライト事業を展開できれば、地元としては最高の出来だと思う。何とか実現させたいと思う。

### 博覧会協会

- ・博覧会会場に来たお客様にインタープリター付きで御案内をし、会場の中だけでは見られない里山の関係の何を見せるかによって決まってくるかと思うが、約1時間位で歩いて一周して同じ場所に帰ってくるというルートなので、そう遠くまでは行けないのではないかと思う。場合によってはバスを仕立てて行くというのかもしれないが、まだどうなるか分からない。
- ・どの程度まで行くか、1時間にするのか2時間にするのかということも含めて、今後具体的に検討したいと思っている。

## 木村座長

- ・ 出口委員の話については、博覧会協会としてのプログラムもあるが、会場外で各自治体がどのようなサポートの体制をもってどのようなプログラムで展開するかということから言うと、瀬戸市が何を考えてどのようなプログラムでおもてなしをするか、どのような形で人を呼び込むかという話になっていくのだろう。
- ・ 最近、瀬戸市の博覧会に係る動きが見えないので、何か動きがあれば御説明いただきたい。

## 瀬戸市

- ・ 今、瀬戸市は「まるっとミュージアム」、即ち、市内全体を博物館に見立てて「瀬戸蔵」を中心に駅前や既存のいろいろな施設に仕掛けを作り、博覧会に来た方に瀬戸の町にも来ていただくという計画を検討中であり、来年度位には発表したいと思っている。
- ・ 出口委員の意見は、海上のパイロット事業を行っている場所に、海上会場のサテライトみたいなものを位置付けたらどうかと言いたかったのではないかと。

## 木村座長

- ・ 瀬戸市の「まるっとミュージアム」はそれはそれできちんとやっているが、博覧会のテーマとのからみで言うと、そこの部分をやはりきちんとやらなくてはいけないのではないかと御意見だと思う。

## 賀来委員

- ・ 愛・地球博の経緯から言うと、ここにゲートができるというのは1つの大きなシンボルになる。可能であればせつかくここまで来たのだからぜひゲートを設けて、大量に人が出入りすることはしないにしても、徒歩で来た方に入場券を発行するとか、もうひと踏ん張りできないかと思う。
- ・ 協会側の環境プログラムで会場外へ出るケースがあるのならば、県の恒久施設で会期中に行われる展示のプログラムの一環として会場から海上の森に出ていただくということも考えても良い。座長が言ったように、瀬戸市のプログラムとして海上地区にお客様を迎えに来るということも考えていただけたらと思う。
- ・ 博覧会では、いくら何々会場とか関連会場が設けられ、パンフレットがあって自由に行って下さいと言っても、ひとつ敷居があるとなかなか行けない。だから、ここはプログラムをもっと多様に作ることを頑張っていたきたいという感じがする。

## 博覧会協会

- ・ 賀来委員がおっしゃったところは、市からも相当強く協会のほうに呼びかけがあって、現在検討中であり結論がでていない。
- ・ 今のところ、我々のプログラムはインタープリターがゲートの鍵を開けて出入りをする形で対応できるのではないかとということで検討している。

## 木村座長

・市民ボランティアが市民交流広場で行ういろいろなプログラムの中から、会場外へ出て活動したいという要求が当然出てくるだろうと思う。この要望が高まれば、今の博覧会協会の話とリンクができるのであろうか。

## 博覧会協会

・現在、市民ボランティアの活動は組織を立ち上げるところである。組織が立ち上がった段階でその方達と意見交換をしながら検討をしていきたいと考えている。

## 大竹委員

・ゲート施設の中というのは、全体の里山学びと交流の森というテーマからみると、博覧会開催時にそこだけ囲われてしまう空間である。それをいかに後の全体のところに繋げていくかという関連付けを、きちんとっておかないと、博覧会のためだけのもので終わってしまうのではないか。

## 事務局

・ここで実施される環境教育プログラム等は、その後の里山学びと交流の森のゲート施設のほうに受け継いでいく。それから、今海上の森で行っている森づくり体験事業等の県民参加事業をこの場所で展示をしていくとか、いろんなリンクの仕方があり、そういったことをここで実施していきたいと考えている。

・ゲートゾーンというのは、あくまでも里山学びと交流の森の6つのゾーンに分けた入り口の施設ゾーンであるゲートゾーンであり、それを先行的に県が整備して博覧会に活用していただくというのが基本である。

## 木村座長

・そういう意味では、ゲートゾーンだけで機能していたのではしょうがないのかもしれない。  
・博覧会の用地は柵で囲うわけであるが、それはかなりの構築物になるのか。

## 博覧会協会

・環境破壊に繋がらないような形の柵の仕方を現在模索中である。まだこの場では発表できないが、通常人が入るところは完全に柵をし、それ以外は簡便な柵を一応造るという方向で考えている。

## 津田委員

・ゲートゾーンに関しては、最初から否定的に捉えており、いらないと思っている。県道を通すためのゲートとして先に何らかの施設が必要であるから整備するというように説明を受けている。

・博覧会開催中において、市民交流広場や県のパビリオンへ訪れるために海上へ来た人が、非常に高低差のあるこのゲートゾーン、里山遊歩ゾーンまで果たして行くだらうか。博覧会時に

おいてたださえ青少年公園と海上地区の距離があるので、時間的には移動するのがとても大変だと思う。その上で高低差のある山の上まで登るのだろうか。青少年公園でも山の部分があるのだから、山に登るのなら性格は違うのかもしれないがそちらでも十分対応できると、一般の来場者はそう思うのではないか。だから博覧会のために金をかけた整備をしないほうがいいのではないか。

・ここは里山学びと交流の森全体のゲートであるということを再三聞いているが、やはりゲートとしては不自然である。平らなところから里があって里山があるのが自然の動きだろうと思うが、まず山に登って非常に急峻なところを下ると恒久施設があり、その向こうに田んぼがあって里山が広がっているというのは、ゲートとして機能しないと理解している。

#### 木村座長

・博覧会開催時にここに人が行くかどうかというのは、県と国の施設がどれだけ魅力的であるかにかかっている。それは博覧会の元々のテーマから言えば大変重要なポイントであり、展示施設だけ見たらもういいと思わせてしまったら博覧会のメインテーマからずれてしまうので、相当頑張っていたかなくてはならないと思う。

・その時に、このゲートゾーンの部分だけではとても満足できないからもう少し森の中心まで行ってみたいという意見がどんどん入場者から出てきて、それを引っ張っていくボランティアがいるというような構造ができれば一番いい。それは、展示の成熟度によって変わってくると思う。

#### 事務局

・里山遊歩ゾーンについては、たくさん人を入れることを前提とはしていない。ある程度限られた人数でインタープリターを付け、ここでいろいろなプログラムを展開するというのである。

・博覧会のためだけに整備するのではなく、里山学びと交流の森づくりの施設ゾーンでありゲート施設であるという位置付けであり、将来的には展示機能、学習的な機能も持たせたところになりたいと考えている。

#### 木村座長

・林委員の意見のように、博覧会とは関わりなく、ここで何を見せるのかということを確認にして、そのためにどういう森の整備をしていくのか、ということに帰結するのではないか。

・このゲート施設についてはこの方向でいくことになると思う。委員の方々の意見を前提にもう少し細かな部分を詰めていただきたいと思う。

### (2) 里山学びと交流の森づくりの基本的方向(素案)

#### 事務局

・資料2「里山学びと交流の森づくりの基本的方向(素案)」について説明。

## 木村座長

- ・中身が膨大であるので、今日はこういう形の取りまとめの方向でいきたいということを前提として、質問や事実確認をすることにしたい。

## 波田委員

- ・基本的な責任者が誰なのか分からない。NPOとボランティアで勝手に運営してもらい、常駐する人間は誰もいないのか。

## 事務局

- ・博覧会開催までに県民の自主的な活動体が生まれるような仕組みを作っていくことは、県でやろうとしている。博覧会後は拠点施設ができ、そこには全体を管理運営する県の部署があることになる。

## 波田委員

- ・こういう施設を造ると、事務方の所長がいるだけで、エキスパート、スキルのある人間が誰もいないというのが最近多いが、そういう施設ではボランティアを育成するのも掛け声だけになってしまい、機関運営は難しいと思う。
- ・ボランティアというのは単なる無料奉仕を趣味としてきているわけではなく、それに参加することによりいろいろな経験や知識が得られるから永続性があるのだと思う。

## 事務局

- ・里山学びと交流の森パイロット事業は2か年目になるが、その中で熱心に取り組んでいただき準スタッフのような形で参加していただいている方もおみえになる。いろいろな取組の中でそうした人たちを少しずつ育成し輪を広げていきたい。
- ・将来的にここが拠点施設となり、県の専門の部署が担当することを考えている。

## 波田委員

- ・そこに関する文章がまったくない。方向性がない。

## 木村座長

- ・今日持参した冊子は、岐阜県の多治見市で活動している里山づくりの中核団体が作ったパンフレットである。中心に地球村という多治見市の施設があるが、ここには事務職員は1人もいない。市の職員の所長以外は、専従の4、5名のスタッフ、主に企画学芸担当、実際に里山の中で参画できる人、星・天文学のことをよく分かっている人、という人達をボランティアではなく常勤に準じた形の非常勤職員として雇用して対応している。事務員がいて活動を管理をするというのではなく、この人達が全体として活動しているという事例である。こういう形が県の方で受け入れできるかは分からないが、ボランティアに丸投げということはないと思う。

## 大竹委員

- ・全体が見えてこない。森林公園の大きなものができるような感じになってしまう。それは、実際に基になる理念が全体に一本通っていないからである。
- ・林業的な観点からのアプローチ、環境保全の面でのアプローチといった全体をまとめていくためには、「里山学びと交流の森づくりの会」を博覧会の前に立ち上げ、そこで全体の方向性を決めた上で博覧会にどうアプローチするかというのが本来の形ではないか。

## 事務局

- ・博覧会開催時には自主的な活動体が体験プログラムを実施することとしている。この段階で、県民参加組織につながる準備会合を立ち上げいろいろな活動をしていただく。博覧会開催後はそれらのプログラムをどのように体系化していくかということも含め、連続してそういう活動をできる組織づくりをしていきたいと思っている。

## 木村座長

- ・今までの議論を受けて事務局から本日素案を出しているが、このままだと、県が私共の意見聴取の基に報告書を作成したということで終わってしまうような気がする。この報告書自体の主語を「私共」にして出すことが本当は望ましいのではないか。

## 林委員

- ・実現の可能性を前提として、人、活動体の問題について、この流れだとできないと思う。21ページの博覧会後の取組は、博覧会前に取り組んでおかないと博覧会後にこのようにできない。
- ・犬山の自然活動では、ボランティアが日常の自主的な活動のプランをたてて実践しているが、全国雑木林会議というイベントの時には事務局や運営をした。それが終われば、また事前の元の活動に戻れた。このように、博覧会前に素材があって人材を育てておく必要がある。
- ・地元の瀬戸市が主力にならないと人材は育たないと思う。地元でこれを組み立てていき、博覧会後も動いていく。博覧会の時にはそこにみんなが関わっているようなイベントを支えていく。しかし、そのコントロールタワーは地元を主力にした人材、ネットワークである。
- ・博覧会前に組み立てておき博覧会後に元に戻すときに、主力にしていくところを選別する役割を果たすコントロールタワーが必要である。即ち地元が自分達の場所として責任をもって活用していく。地元が主力にならないと他にはできない。まさに瀬戸市の森であり、瀬戸市の市民が主力になって動かないところへ、なぜ外部からサポートに行けるのか。
- ・博覧会前に作るべきものを博覧会前に立ち上げておかないと、博覧会後にそれは動かない。日常活動をしている人達が、博覧会という国際的なひとつのキャリアがやれる。そこにはいろんな人達、全国的なことをやっている人達が関われるが、主力の核はそこに歴然としてある。そういうことをやるのが自分たちの日常活動の刺激や学びの機会になりうる。この流れの軸が一番大事だと思う。
- ・博覧会を契機にして何ができるかというと、私はこの人の動きだと思う。新たに里山を作り

出すのだったら、それを社会システムのような形で組み立て直す。それに今から取り掛かっておく必要がある。この一番軸になる部分を作るから「基本的方向」である。そういうレイアウトにできれば、この素案を愛知県並びにこの検討委員会の素案として出すことに私は賛成する。だからこそ実現の可能性を求めることになる。

### 木村座長

- ・ 地元がどれ位主体的に活動できるかに懸かっているのだと思うが、この10年間に瀬戸の地元が臆病になってきて海上の森が誰の森かわからないようになってきているように思う。
- ・ もう一度地元の立場を明確にして、同時にこの数十年間海上の森に関わってきたいろいろな団体や個人の方々が持つ膨大なこの森の知識の蓄積をベースにしなが、地元の活動とうまく融合していけるかどうか。今まではそこがうまくいかないところがあったので、瀬戸市民としては一步退いてしまっているような気がする。

### 鈴木委員

- ・ 県のパイロット事業にこの2年間関わり、新たな人的な交流という面では面白い面がたくさんあったが、何かがない。それは今林先生が言われた芯の部分であり、私達地権者がしっかりしていない、県の協力という形でしか自分を表現していないところが良くない。自分達がしっかりした方向性をもって維持管理していく必要がある。
- ・ いろいろな各種団体が作ったパンフレットを見ても文化性がないので、貴重な自然が残された恒久的な保全の場であるという意味では海上ではなくてもいい本になってしまっている。海上が海上であるということを意識するためには、我々地権者がもう少ししっかりしなくてはいけない。それは私達の持っている田んぼ、山、水利のもの、それを正確にこなしていくことが大事なことではないか。
- ・ 水田耕作の時に、昔にこだわって手作業を取り入れるところに文化性があり、何か面白いものや懐かしい物を見出す。
- ・ 年中行事の中で、四季の移り変わり、日本文化の感性が面白い。水田の疑似体験は、水田をやったことがない人間には面白いかもしれないが、例えば稲作の稲のところに雷が落ちてそこが神様になるというような、面白いイメージの世界が展開できたらより豊かな認識ができるのではないだろうか。
- ・ そういことができるのは私達でしかない。私達の権利というよりも責任を含めてアピールし仲間を募って、その中で文化的な感性を体験できればもっと楽しい。楽しくなければこの海上というのは意味がないと思う。
- ・ ボランティア、県や瀬戸市に感謝している中で自分自身がなくなっている。どうやってアイデンティティを保っていったらいいのか。
- ・ 万博の後なんて寂しいことを考えずに、この万博というチャンスは何らかの形で協力してやっていきたい。参考になるものは吸収したいし、アピールもしたいと思う。

### 波田委員

・ゲート施設について、往復1時間ならば直線距離で1キロは要らないと思う。ここは尾根部はわりと平坦だが谷底はものすごく急峻で、巡回ルートを設定すると大きな工事をすることになるだろう。大変なお金をかけるということか。

### 事務局

・尾根部分の平らなところで現況を生かしながら回遊性をもたせ完結させる。大きな回遊をするのではなく片道200mから250m位である。

### 波田委員

・違う自然を見せて、それぞれを比較するという話ができないような状況ではないか。

### 事務局

・ここは狭い場所であるが、回遊するといろいろな林相が見られ学習できる場所であると思う。

### 波田委員

・経験豊かなインタープリターがやる必要もなく、単なるフリーターをこの期間雇って、マニュアル通りに番号の所で喋らせるくらいの対応で可能なルート設定だと思う。

・万博でやる自然観察、自然と親しむという活動はそういうものではないと思う。これがこれで終わるのなら、本当の意味での自然観察を地元の方々が独自のプランを作って走らせていただきたいと感じる。

### 博覧会協会

・自然と人との関わりをどうやって見せるかというコンテンツ、ストーリーを考えたいと思っている。具体的にどんなプログラムか、まだ確定していないので御説明できないが、1時間で全てプロのインストラクター付きで動くというパターンで案を作っている。

### 木村座長

・福島のおつくしま博のルートでは、ボランティアがたくさん登録されていて、それぞれの得意分野によって話の中身が全然違っていった。それがあらかじめ提示されていて、聞きたい話の内容によって人を選べるような導入があった。そういう色々な展開はありうると思う。

### 馬宮委員

・素案について、里山文化を目指し循環型社会の糸口を探るという内容では、人工林を切ってまた人が植えて再生することだけを循環型と考えている気がするが、それは違うと思う。

・昔からの雑木林を切って使い、切ったあとはコナラやシデコブシで再生するという人を人の生活に取り入れながらやったと思う。そういうことが含まれていない。

## 木村座長

・現在人工林である場所を循環の森と位置付けているが、そこをどうするかということについては、人工林を切ってまた植林するという話に限定しているわけではないと思う。

## 馬宮委員

・そこだけを循環の森と名前を付けるのは分かりにくいと思う。海上の森で里山ということを見ると、循環型、生活や人に結びつくようなやりかたを考える必要がある。

・海上の森を博覧会開催までの2、3年で整備するというのを、県の国際博推進局が担当している。万博後は他の部署が所管することになるので、将来のことについて言及できない立場であると思う。今、制約されている範囲内で議論をしても実現性があるのか。

・いろいろな活動体を組織した「里山学びと交流の森づくりの会」について、県の所管部署が責任を持つ必要がある。

・この素案は、万博までのことをやるという制約の下にある国際博推進局が作成したため、あまり現実味もなく、それほど内容に根拠もない。

・制約がない我々委員の代表である座長が、私達の議論の結果に基づいて素案を作っていたきたい。

## 木村座長

・庁内調整をして次の所管部署へプログラム自体が移っていくので、国際博推進局は先がないから万博後のことは言及できないというわけではない。行政というのはそういうものではないと思う。

## 林委員

・人工林だけが循環の森ではないという理屈は正しいが、人工林を全て自然林に変えようということでは、森林や山村は守れない。林業という生業が成り立たない。

・林業と森と日本の稲作水田は同じ位置付けである。立派な稲作水田がなければ、日本の森は育たなかったことは常識である。これは海上の森だけの話ではない。日本は林業を忘れていないということをここで見せよう。

・計画的に行う循環の森と、結果的に残ってくる循環とは違う。人工林を間伐することと、里山の雑木林を間伐することは意味が違う。だから確信をもって循環の森と言える。その部分を人類が守らないといけない。

・今、私達は森林利用に対して収益を得ていく世代を育成していこうと、国際的に議論している。定住民が収益を得ること、経済社会の一環としての循環の森の利用を無視してきたところに、森林崩壊が日本も含めて国際的に起こっている。林業が滅びて森林が栄えることはありえない。

・循環の森というのは、そのような意味で人工林、林業を位置付けている。高度に工業化した日本の森が林業をきちんと組み立てていくことは、東南アジアや途上国に対して大きな勇気を与える。

- ・人工林を悪者にするような、ヒノキやスギの樹林が自然の破壊だという風潮を変えるという意味で、戦いの拠点だと思う。

#### **木村座長**

- ・この素案の内容を充分理解した上で実現可能なレベルで私達委員がまとめ直すということであり、全面的に行政と別の視点で書き直すのではないと思う。

#### **津田委員**

- ・素案において「里山学びと交流の森づくりの会」がいろいろな団体を束ねるという想定になっているが、これは人間関係がとても難しいと思う。
- ・各団体の微妙に違う価値観をどうしたら束ねることができるかというのが、もともとこの検討会に示されたことであったような気がする。この難しさに対して素案は応えていないし、我々の中にも答えが見出せていないと思う。その部分をもう一度考えて見る必要があると思う。

#### **木村座長**

- ・いろんな団体を束ねて擦り合わせたら一つのものができるとは思わない。これは海上の森の地元地域が、どのようにここを活用していきたいのか、そのために各活動団体がどんな協力ができるのか、ということに集約されている。

- ・そういう意味で、林委員の意見の「コントロールタワーの役割」のとおりだと思う。いろいろな活動団体を集めるほど議論は拡散していく。その核になるのは地元地域だということをはっきり認識しなければいけない。これについては瀬戸と県が真剣に検討しなくてはならないと思う。

- ・素案をどのように実現可能の方向目指して書き上げていくか、地元を核にした活動としてどう掛け合っていくか、という問題について、次回の検討会までに、委員だけで集まって議論をする場を持ちたい。

- ・このままの素案だと県の報告書になる。その中に私達の議論を入れ、「私達」を主語とすることを議論したい。

### **3 . 報告事項**

#### **事務局**

- ・参考資料1「平成14年度里山学びと交流の森づくりパイロット事業」について説明。

#### **森林保全課**

- ・参考資料2「平成14年度県民参加の森づくり事業の実施状況について」について説明。

#### **事務局**

- ・これをもちまして、第6回「里山学びと交流の森検討会」を終了させていただきます。ありがとうございました。

・閉会